

現代英語の語法

—比較級+than 構文における形容詞とその対立語—

福 島 一 人

本論文は1977年11月、早稲田大学英文学会研究発表会において口頭発表した「形容詞 deep の用法と用例について」に若干の修正、また当時ふれなかった種々の問題点を加え、まとめたものである。

比較級+than 構文において、ある形容詞とその対立語がどのように関連しあうかを比較尺度とその値に注目して述べる。

実際の文については下記の用語を使う。後に述べる、比較尺度とその値に着目した場合の各文の意味を表す、「内在構造」(現在適切な用語が思いあたらないので、このように呼んでおく)との相違点は、比較級とその構成素の比較標識である。

<u>This swimming pool</u>	is	<u>deep</u>	<u>er</u>	<u>than</u>	<u>that swimming pool.</u>
対比要素		形容詞	比較標識	比較補部 導入要素	対比要素
比 較 主 部			比 較 級	比 較 補 部	

比較級は、形容詞と比較標識とからなる。比較標識には屈折変化形式語尾を代表する -er と迂言変化形式を代表する more, そして less が存在する。better, worse など不規則変化比較級は比較標識 -er をもつ比較級のなかに含める。

1. 対立語と対立語の発見

1. (This swimming pool is deep.
This swimming pool is _____

deep と反対の意味を表すと思えかつ——に入れることができる形容詞を deep と互いに対立語の関係にある形容詞と呼ぶ。対立語は一定のコンテキストにおいて発見されるのであり、コンテキストから独立して発見されるのではない。

形容詞 deep の「反対語」は *A Dictionary of Synonyms and Antonyms* (Popular Library) によれば, shallow, superficial, ignorant, inexperienced, unintelligent, unintellectual 等である。しかし 1. における deep の対立語はこれら「反対語」の集合のなかでは shallow だけである。

対立語の定義を「反対の意味を表す…」と記したが, この「反対」とは 1. においては, 「深い」に対する「浅い」であり, 両者共測定上の「深さ」の程度の高, 低を表し, 同一次元内にある。

対立語はコンテキストによっては複数存在することもあり, 又全く存在しない場合もある。

いま deep を構成素とした文を複数挙げ各文における対立語を発見しよう。各文の () 内の語は, その文における deep の対立語であり, (?) は対立語が存在しないと考えられることを表す。

2. This swimming pool is deep. (shallow)
3. The dog's love for its puppy is deep. (shallow, superficial)
4. The gash in the side of this mountain is deep. (?)
5. The recess behind this organ is deep. (?)
6. The shrubbery around this house is deep. (thin)
7. His voice is deep. (high)
8. This lodge is deep in the forest. (?)
9. Fuchsia is deep. (pale)
10. His sleep was deep. (?)

文例は *Webster's Third New International Dictionary* をもとにした。

これらの対立語のうちで thin, high, pale は *A Dictionary of Synonyms and Antonyms* に「反対語」として記載されていない。一定のコンテキストに依存する対立語のすべてを記載することは不可能である。

各文の対立語の発見は 3 人の informant によった。彼等は米人, 40才以

上, 男性, 大学教師である。

あるコンテキストにおいて発見される対立語は, すべての人間に対立語と認められるとはかぎらない。例えば 3. の *deep* の対立語として *superficial* のみをはっきり対立語と認め, *shallow* を余り対立語と認めたがらない *informant* もいたし, *shallow*, *superficial* 双方をはっきり対立語と認めた *informant* もいた。前者は一人, 後者は二人であった。

またある時点で発見される対立語が別の時点で発見される対立語と同一であるとはかぎらない。

以上のように対立語は可変的である。しかしある人間により, ある時点で発見される対立語は, その時点で発話される比較級+*than*構文の数や同義性について重要な意味をもつのである。

2. 形容詞とその対立語の比較級

11. The dog's love for its puppy is deeper than the man's love for his son.
12. The man's love for his son is shallower than the dog's love for its puppy.
13. The man's love for his son is more superficial than the dog's love for its puppy.
14. The man's love for his son is less deep than the dog's love for its puppy.

(註) 本論文でとり扱うのは比較級+*than* 構文であるので *not as-as* などの構文はこのなかを含めない。

例えば, ある時点で, ある人が, 文11. と同じ内容になりうる文を, 比較主部対比要素と比較補部対比要素を入れ換え, 否定副詞 (*no*, *not*, *seldom*, *hardly*, ...) を使うことなくつくる必要があるとしよう。「同じ内容になりうる」は, 「同義である」とは異なり, 「同義になる可能性がある」という, はなはだ緩やかな意味である。文3. のコンテキストにおいて *deep* の対立語として *shallow*, *superficial* を発見した人なら, 12. 13. 14. をつくることができる。

deep の対立語を *superficial* のみとする人なら13. 14. をつくる。

deep の対立語を発見できない人なら、文 14. はつくれるが、12. 13. をつくることはできない。

deep の対立語として shallow, superficial を発見した人が、その時点でつくる文 11. と「同義である」比較構文はどれか。

3. 比較級+than 構文の同義性

本論文でいう「同義である」はどういう意味が説明する。これは informant がうけとった「同義である」という意味と同じであると思う。

15. He is taller than she.

16. She is shorter than he.

(15. 16. の he, she はそれぞれ同一人物)

これら 2 文は、he, she の背丈が、発話当時、発話者によって「高い」と意識されても「低い」と意識されても、「自然」に発話されうる。「自然」とは皮肉な感じやユーモラスな感じを相手に与えないということである。

背丈という尺度（比較尺度）における「高い」や「低い」という観念を「尺度の値」あるいは「比較尺度値」と呼ぶ。

尺度の値に具体的数値が含まれていると考えられる場合もある。例えば、15 の she の背丈が 6 feet とすれば He の背丈は 6 feet 以上（厳密には 6 feet を含まない）である。比較級によって He の「背丈」という尺度の値は 6 feet 以上の無限の値を含みうるのである。

15. が発話者にとって He の背丈も she の背丈も「非常に高い」観念がもたれるとしよう。話題の焦点が、現場のコンテキストにおいて she に移ったと仮定すれば、16. もその時点で「自然に」発話されうる。15. と 16. は焦点が異なっている。

しかし以上の如く「尺度の値」に着目した場合、15. の尺度の値がいかなる値でも、焦点の移動があっても、例えば、発話者が 15. を発話しようとしたが、現場のコンテキストが急変し、焦点を she にあわせなければな

らないという場合でも、16. を「自然」に発話できる。本論文ではこのような場合、15. と16. は、「同義である」という。

さて、3. の deep の対立語として shallow, superficial を発見した人が、その時点で発話できる11. と「同義である」比較構文は12. 13. 14. のうちどれか。

15. 16. の例から考えれば12. 13. になると思われる。しかし、先の3. の対立語として superficial のみを確信をもって挙げた informant も shallow, superficial 双方を確信をもって挙げた informant も、11. と「同義である」比較構文として文14. を選択した。

17. This swimming pool is deeper than that swimming pool.

18. That swimming pool is shallower than this swimming pool.

19. (?) That swimming pool is less deep than this swimming pool.

2. の deep の対立語を informant は shallow と一様にした。しかしこの場合、彼等は、17. と「同義である」文として文18. を選択した。19. については、「使われないと思うが、非文とは言えない。」という意見が2人、他の1人は19. を「非文」とまで言った。

問題は同一の informant が17. と「同義である」文として18. を選択したが、11. と「同義である」文としては、12. を選択しなかったことである。そして17. と同義である文として文19. を選択するのをためらったのに、文11. の場合、全員が文14. を選び、そのみを選んだことである。

4. 「内在構造」

20. He is taller than she.

21. She is shorter than he.

22. (?) She is less tall than he.

informant のすべてが、20. と「同義である」文として21. を選択した。この場合も tall の対立語である short に比較標識がついた比較級を構成素とする文が全員に選択されたわけである。

22. は、19. と同様の評価が下された。deep と tall はこれらの文の中で、

単音節の形容詞であり、両者共具体的測定が可能である。文 14. における deep はこれらとはちがひ、個人個人によって測定の違いがでてくるという抽象的なものである。しかし 11. 17. 20. から、これら deep, tall は比較標識として屈折形式 -er をとるという点で共通している。

さて、20. と 21. は、それぞれ比較主部対比要素と比較補部対比要素とが入れ換わり、互に対立語の関係にある形容詞の比較級をいれた文である。比較標識は -er と共通しているが、比較標識と共に比較級を構成する形容詞は互に対立語である。その形容詞は 20. では tall, 21. では short である。

..., comparisons with *than* are as a rule indifferent or neutral; "Peter is older than John" does not imply that Peter is old, and the comparative may really therefore indicate a lesser degree than the positive would in "Peter is old." Nor does the sentence "Peter is older than John" say anything about John's being old;...

(O. Jespersen: *The Philosophy of Grammar*)

この引用によれば 20. は He is tall. の意味も she is tall. の意味も含んでいないことになる。しかしコンテキストから独立させた場合このようなことを言うほかはない。しかし本論文ではコンテキスト中における比較尺度及びその値の広がりをも問題にしているのである。従って 20. の taller は、あるコンテキストにおいては、He is tall. の tall の意味をもち、別のコンテキストにおいては、He is short. の short の意味をもつこともできる。だから taller の意味は尺度の値の低値から、例えば very short から、尺度の値の高値、例えば very tall に到るまでの無限の尺度の値の集合を含んでいることになる。そして個々の値はある一つの発話において同時に二つ存在することはない。

さて、20. と 21. の同義性を説明するにはこれらの文が、ある共通の比較の基準をもとにして、比較主部対比要素が比較補部対比要素より優るか劣るかを意味する文であると考えればよい。共通の比較の基準とは、先に述べた「比較尺度」である。

20. He is taller than she.

20. は「背丈」を比較尺度として、He が she より優ることを意味する。今、比較尺度である「背丈」を **tall** と表し、比較尺度において優ることを意味する標識を **more** とする。more を今後「比較尺度値増加標識」と呼ぶ。20. を比較尺度と尺度の値に着目した場合の意味を明確にするため、20. について、次のような「内在構造」(現在適切な用語が思あたらないのでこのように呼んでおく)を設定する。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{He is more } \boxed{\text{tall}} \\ \text{She is } \boxed{\text{tall}} \end{array} \right.$$

「内在構造」は、比較尺度を明記し、各対比要素の比較尺度を基準にした優劣を表すものであり、20. の「内在構造」は比較主部対比要素が優ることを表している。

比較級+than構文は、聞き手にとっては、比較補部の尺度の値がわかっていることが前提になり、それによって比較主部の尺度の値が伝えられる文である。一方、発話者にとっては、比較主部、比較補部、双方の尺度の値がわかっていることが前提になる。つまり「内在構造」はこうした発話者の知識を表しているのである。聞き手にとって **tall** の尺度の値に関する情報が無ければ、20. は意味をなさなくなる。聞き手にとっては、確認のための対話でないかぎり、**tall** の値の情報があり、比較増加標識によって、she の尺度の値より He の尺度の値が高いことを知るのである。

「内在構造」における **more** は比較尺度 **tall** からみて、比較補部対比要素よりも比較主部対比要素の方が優る標識であり、文 20. においては比較標識 **-er** に実現されているのである。「内在構造」中の **more** が比較標識 **-er** に実現されるのは、すなわち **more tall** が **taller** に実現されるのは、**tall** が屈折形式変化語尾を一般的にとる形容詞であることによる。

「内在構造」における比較尺度値増加標識 **more** に対立するものとして、さらに「内在構造」中に、比較主部対比要素が比較補部対比要素より尺度の値で劣ることを意味する標識が必要になってくる。これを比較尺度値減少標識と呼び、**less** で表す。従って、全ての比較級+than構文の「内在構造」にはどちらかの標識が入っていることになる。比較級が複数含まれて

いる文では双方が存在する可能性がある。

21. She is shorter than he.

この文は「背丈」を比較尺度とし、She が he より劣ることを意味する。文20. のときと同様に比較尺度である「背丈」を **tall** と記し、その尺度において劣ることを比較尺度値減少標識 **less** によって表すと、21. の「内在構造」は次のようになる。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{She is less } \boxed{\text{tall}} \\ \text{he is } \boxed{\text{tall}} \end{array} \right.$$

20. の「内在構造」の比較尺度値増加標識 **more**、比較尺度 **tall** が、形容詞 **tall** + 比較標識 **-er** に実現されたが、21. の場合は「内在構造」の中の比較尺度値減少標識 **less**、比較尺度 **tall** は、形容詞 **short** + 比較標識 **-er** に実現されることになる。これは、次のように考えられる。比較尺度 **tall** という無数の値の集合線上の一方に高い値 **tall** (背が高い) がのび、もう一方に低い値 **short** (背が低い) があり、**tall**, **short** は同一次元内にある。**tall** に比較標識がついても、**short** に比較標識がついてもこの関係は崩れない。従って20. 21. のようなコンテキストにおいては、**more** は、実際の文にその尺度の値の高値を意味する形容詞に比較標識をつけたものとして現れ、**less** は、低値を意味する形容詞に比較標識をつけたものに実現される。

20. の比較尺度 **tall** の値と21. の比較尺度 **tall** の値は同値ではない。もし同値と考えれば、20. の she, he と21. の she, he はそれぞれ別の人間になる可能性が生じ、もはや20. と21. は同義ではあり得ない。「内在構造」の意味することは、20. と21. が「背丈」という比較の基準によってそれぞれの比較主部対比要素と比較補部対比要素間の優劣を表すものであり、20. 21. の比較尺度が同質であることは表すが、しかし、その尺度の値が同値であることを表しているのではない。同値であるのは各「内在構造」の上段の と下段の のみである。先にも述べたが、発話者は各対比要素の尺度の値を発話当時にわかっていることが前提になる。もしわからない場合、20. 21. は、ふざけた発話か意味のない発話となる。

例えば、比較尺度の値の集合のなかに数値が含まれるとしよう。Heの背丈が170センチであると、20.の **tall** の値は170センチより低いことになる。しかし21.の **tall** の値は170センチとなる。**tall** がすべての尺度の値の集合であり、その値が同時に複数存在することがないこと、そして、発話者が発話当時に各対比要素の値が当然わかっていることを考えあわせれば、20.と21.の **tall** の値が違ってても矛盾を感じることはないだろう。

5. 比較尺度と比較尺度値増減標識

20.の「内在構造」には more **tall** が存在したが、これは比較級 taller として文20.に実現されている。21.の「内在構造」には less **tall** が存在し、比較級 shorter として実現されている。このことは比較級 taller, shorter が次の過程により実現されると考えられることは先に述べた。すなわち、比較尺度 **tall** はその値の高値として tall (背が高い)、低値として short (背が低い) をもつ。more **tall** の比較尺度値増加標識 more は、tall が単音節の屈折形式語尾 -er を比較標識としてとるから、-er として実現され、taller となる。また less **tall** は、低値を意味する形容詞 short に比較標識 -er をつけた比較級 shorter として実現される。これは尺度 **tall** の線の上に short があることが前提になる。

これまで 20. 21. の「内在構造」中に同質の比較尺度 **tall** が存在した。**tall** は比較尺度すなわち比較の基準が「背丈」であることを表し、またその値が最大値から最小値の無限の値の集合である。これと同質かつ同値のものは実際の文にも存在する。

23. How tall is he?
24. He is five feet tall.
25. He is as tall as she.

23.は次のような意味をもちうる。すなわち、「彼はどの位の背丈ですか。」と、「彼は背が高いが、どの位高いですか。」後者は背が高いことが前提となっている。前者は tall に強勢が置かれた場合の意味で、後者はHowに強勢が置かれた場合の意味である。前者の場合の tall が **tall** と同質、

同値である。つまり「背丈」という尺度で、その値は無限に広がっているのである。

24. が発話される際、発話者の背丈が 6 feet あり、また一般平均が 5.5 feet であったら、発話者にとって He の背丈は低い、すなわち He is short. という前提があるはずである。しかしこのような前提があっても 24. の tall の代わりに short を使うことはできない。

25. も He, she の背丈が高かろうと低かろうと自然に発話しうる。この場合の tall も無限の値、すなわち高い値から低い値までを含み得るのである。「背丈」を表す比較尺度を [tall] としたのは、つまり、□□中に別の記号を用いなかったのは、□□中の tall がそのまま実現されることを想定したからである。これは比較尺度値増加標識 more, 比較尺度値減少標識 less についても同様である。

19. (?) That swimming pool is less deep than this swimming pool.

先の 3 人の informant は 19. に「非文とは言わないまでも使われなと思う。」あるいは「非文である。」という評価を下した。彼等は先に述べた過程により、18. が当然実現されると考えるのである。しかし、この過程を制限する要因がある。

26. That swimming pool is two centimeters less deep than this swimming pool.

先の 19. を「非文である。」とまで評価した informant が 26. を「自分なら比較級に shorter を使うが、この表現も使われることがある。」と評価したことは興味深い。副詞成分 two centimeters が、「内在構造」中の less [deep] をそのまま実現させることになったのである。このような要因を今後「屈折形式化制限要因」と呼ぶ。

6. 形容詞の分類 (CLASS I)

17. This swimming pool is deeper than that swimming pool.

18. That swimming pool is shallower than this swimming pool.

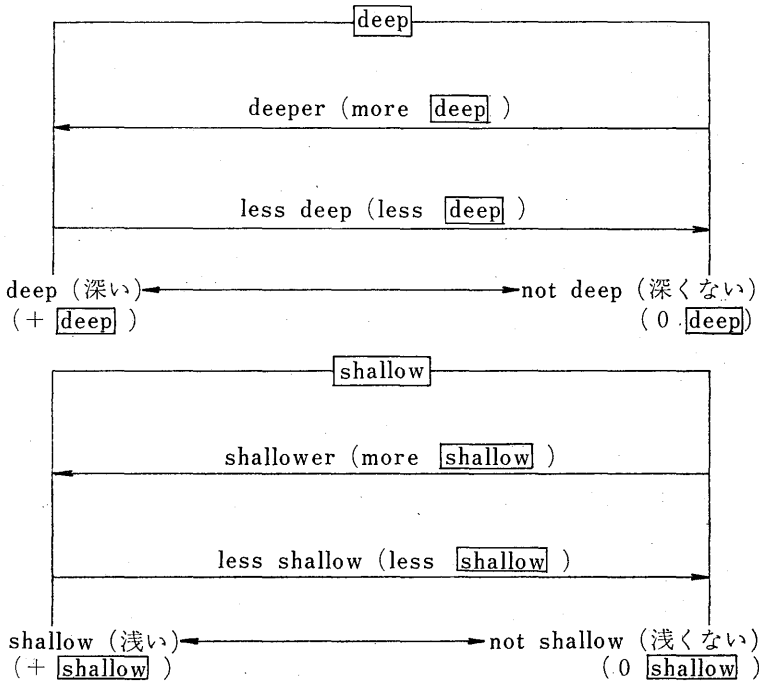
20. He is taller than she.

21. She is shorter than he.

17. 18. は 20. 21. と同様、比較主部対比要素と比較補部対要素がいれかわり、それぞれ対立語に比較標識をつけた比較級をいれている。そして 17. と 18., 20. と 21. は同義である。

このようなとき、deep と shallow, tall と short は共に CLASS I に属する形容詞と呼ぶ。

そして 17. 18. の deeper, shallower と 20. 21. の taller, shorter はこれまでの説明により、大体次のような意味上の位置を占められると思われる。



上図では一方に deep (深い) が比較尺度の高値として広がり、一方に shallow (浅い) が低値として広がる。比較尺度は deep であるから、比較尺度の高値を+ (プラス) deep と表示し、比較尺度の低値を 0 (ゼロ) deep と表示する。

下図では一方に tall (背が高い) が比較尺度の高値として広がり、一方

に short (背が低い) が低値として広がる。tall (背が高い) は + tall, short (背が低い) は 0 deep と表示できる。

20. 21. と同様に CLASS I の形容詞とその対立語に比較標識をつけた比較級を構成素として用いた, 互いに同義である 17. 18. の「内在構造」は次のとおりである。

17. の「内在構造」
 { This swimming pool is more deep
 that swimming pool is deep

18. の「内在構造」
 { That swimming pool is less deep
 this swimming pool is deep

17. の「内在構造」中の上段下段の deep は同質, 同値である。また 18. の「内在構造」中の deep も同様である。しかし 17. の deep と 18. の deep は同質ではあるが, 同値ではないことは, 20. 21. の tall の場合とまったく同じである。

7. 形容詞の分類 (CLASS II)

11. The dog's love for its puppy is deeper than the man's love for his son.

12. The man's love for his son is shallower than the dog's love for its puppy.

14. The man's love for his son is less deep than the dog's love for its puppy.

(注) 説明の便宜上, このコンテキストにおける deep の対立語を shallow のみとする。

先に述べたが, 3人の informant 全員が 11. と同義の文として 14. のみを選んだ。このことは deep, shallow が, CLASS I に分類された deep, shallow とは異なった意味領域を占めることを意味する。17. 18. においては, 一方のはしに尺度 deep の高値を表す deep, 一方のはしに低値を表す shallow が存在し, それらは deep の含む無限の値の集合のなかの一つであった。しかるに 11. 12. における deep, shallow はこのようなことはないと考え

えられる。

17. 18. は *This swimming pool is very deep. That swimming pool is very deep.* という前提があっても、双方共自然に発話される。 *This swimming pool is very shallow. That swimming pool is very shallow.* でも同様である。しかし、 *The dog's love for its puppy is very shallow. The man's love for his son is very shallow.* という前提があった場合、11. が自然に発話されるであろうか。この場合、どうしても皮肉とかユーモラスなニュアンスが入ってきてしまう。11. が発話されるとき、このようなニュアンスを発話者が意識的に含める場合をのぞいては「深い」が前提になる。一方12. は「浅い」という前提で発話されると思われる。もちろん、対比要素の一方が「深い」、一方が「浅い」ということもあるが、この場合、「深い」か「浅い」かどちらかに基準を合わせ、一方がその基準の値が低値になったものとする、すなわち尺度の置き換えがなされるのである。

27. *How deep is the dog's love for its puppy?*

27. が発話された場合の答えとしては、 *Very deep. Not so deep.* 等 *deep* という次元のもので、 *Very shallow.* 等 *shallow* の次元のものではない。 *The dog's love for its puppy is very shallow.* という観念を発話者がもっていて、27. を発話した場合、その発話は皮肉やユーモアのニュアンスを含み、もはや「自然」な発話ではない。

28. *The dog's love for its puppy is as deep as the man's love for his son.*

The dog's love for its puppy is very shallow. The man's love for his son is very shallow. という前提で28. を発話したら、この文は「自然」な発話ではない。

以上のことから互に対立語である *deep, shallow* は、2. のコンテクスト中と3. のコンテクスト中では異なった意味領域を構成することがわかる。11. と12. が同義でないことは、これらが別々の意味領域を構成するからである。このような場合の *deep, shallow* をそれぞれ CLASS II の形容詞と呼ぶ。

(注) もし *deep* の対立語が発見されないとしたら、その *deep* は CLASS II の形容詞である。

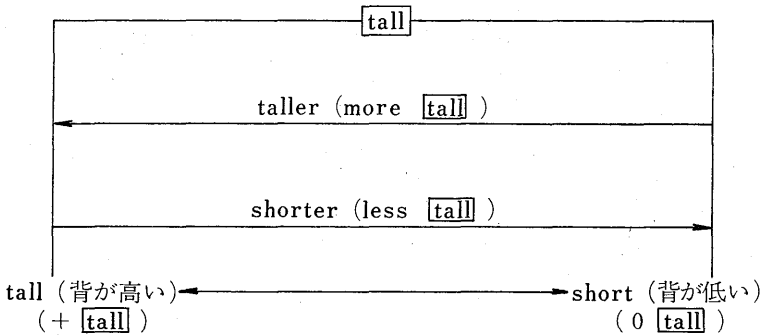
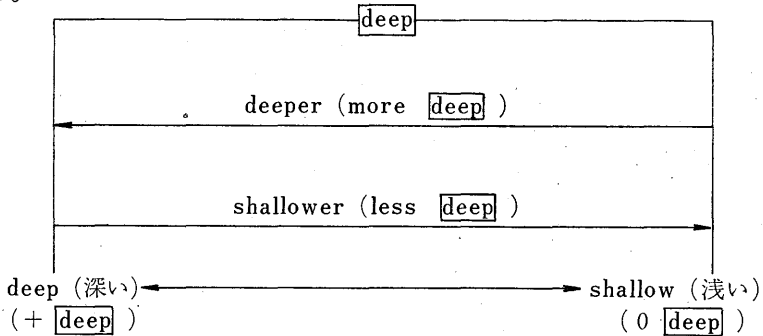
11. と同義の14. さらに12. の「内在構造」は次のとおりである。

11. の「内在構造」 { The dog's love for its puppy is more deep
the man's love for his son is deep

14. の「内在構造」 { The man's love for his son is less deep
the dog's love for its puppy is deep

12. の「内在構造」 { The man's love for his son is more shallow
the dog's love for its puppy is shallow

deep は高い値として deep (深い) を含み, 低い値として, shallow (浅い) ではなく, not deep (深くない) をもつのである。前者は+ deep, 後者は0 deep と表示できる。CLASS II の形容詞 deep, shallow を構成素とする比較級 deeper, shallowerの意味上占める位置は次のとおりだと思われる。



CLASS II の deep は高い値としても低い値としても deep をもつ。従って, less deep が CLASS I の場合のように shallower として実現される

ことはないのである。

11. と 12. は部分的に同義に近くなる場合がある。それは、**deep** が低値であり **shallow** が高値の場合である。ただそれらは次元が違うのだから **deep** が低値ですまされるべき場合を **shallow** の高値で置きかえると、皮肉やジョーク等のニュアンスが入ってくることになる。

今、否定副詞が比較級 + *than* 構文の直前に存在し、同等比較の代用になる例をあげる。形容詞は CLASS II の形容詞である。

...the little lady introducing me was trying very hard to make a comment concerning my obvious injury, but at the same time to assure people that I was still functioning Congressman. As she introduced me, she said, "Now here's our Congressman Henson Moore, and I want to assure you that even though he has hurt his leg, his mind is *no worse* after the injury *than* it was before."
(Reader's Digest)

同等比較の代用になる場合、否定副詞 *no* は尺度の値を低値にする機能をもつ。このコンテキストにおいて発話者が発話する「自然」な表現は次の如くであると思われる。

his mind is as good after the injury as it was before. そしてこの *good* は高値であると思われる。この場合、高値である **good** を低値である **bad** に置き換えたことになり、それによって、ユーモアのニュアンスが生ずるのである。

一方次のコンテキストでは、このようなニュアンスは生じない。引用はアメリカの小中学生向け百科辞典からである。

Some tribes tortured their prisoners. On the Indian's behalf it should be pointed out that their methods of torture were *no worse than* those used on prisoners in Europe a few hundred years ago. Scalping was a little-used Indian practice until Europeans began to offer bounties for the scalps of their foes.
(The Book of Knowledge)

この場合は *their methods of torture were as bad as those used on prisoners in Europe a few hundred years ago.* と書いても差しつかえないだろう。そして原文の尺度 bad はこれと同じ尺度であるから原文は「自然な」表現なのである。否定副詞 *no* が尺度の値を低値にするから、原文から「余り悪くない」という意味が伝わってくる。従って原文を書きかえた *as bad as* の *bad* は低い値である。

8. 屈折形式化制限要因

結局、「内在構造」によって11.と14.が同義であると同様に17.と18.が同義であることが、比較尺度とその値の広がりをもとにして明示された。ただし「内在構造」中の比較尺度にせよ、比較尺度値増減標識にせよ、同価値のものが現実の文にも存在する。

そして、「内在構造」によって我々は、屈折形式になるはずの比較級が迂言形式化したらどのような形になるかを予測できる。例えば、この「内在構造」は、CLASS I に分類された形容詞の比較級が *less shallow* の形で実現されないことを示す。なぜなら、CLASS I に分類される形容詞とその対立語 *deep, shallow* が比較級を構成する形容詞である場合、比較尺度は deep であり、比較尺度値増加標識 *more* が存在すれば高値の *deep* に比較標識がついた形で、また比較尺度値減少標識 *less* が存在すれば低値の *shallow* に比較標識のついた形で実現されるからである。仮に屈折形式化制限要因が存在しても、*more deep* あるいは *less deep* として実現し、*less shallow* としては実現しないことになる。*shallower* については、*less* deep が低値の *shallow* に比較標識をつけて実現されるわけであるが、もし屈折形式化制限要因が存在すれば、*more shallow* として実現されることもありうる。

次の例を見よ。*young* は CLASS I の形容詞に分類される。この場合の屈折形式化制限要因は、前方の *less* という比較標識とのバランスを保つことである。

〔CLASS II〕

比較尺度値増加標識＋比較尺度

CLASS II の形容詞は CLASS I の形容詞の場合とは違って比較尺度値減少標識＋比較尺度のとき屈折形式化制限要因がなくとも、「内在構造」からそのまま実現されることになる。一般に迂言形式しかとらない形容詞の場合に屈折形式化制限要因が働く必要のないことは当然である。

最後に屈折形式化制限要因にどのようなものがあるか列挙する。

(A) 漸層比較

The way grew *more* and *more stony* and this made me suspicious.

(S. Bellow: *Henderson the Rain King*)

他に grow につづいて比較標識 *more* をとる形容詞は、手持ちの文例では、*aware, easy, kind, sure, tender* である。

また become につづくものは、*close, empty, grave, severe, tender* がある。以上の形容詞はすべて CLASS II の形容詞である。

(B) *more, most* や *less, least* を比較標識とする形容詞や副詞の比較級とのバランスの保持

先に Faulkner の例を挙げたが、Zandvoort の *A Handbook of English Grammar* には最上級の例として次の例がある。

London is the *most* wealthy and one of the *least* commodious capitals in the world. [Kruishinga]

(C) 次のような副詞成分が比較級の前に存在する。all the, any, even, far, a little, much, no, rather, still, the, —times

このうち、副詞成分が、even, far, a little, much, no, the—times の例をあげる。

[even]

The eyes spoke to me coldly, but even more speaking, even *more cold*, was the soft head with its speckles, and the Brownian motion in those speckles, a cosmic coldness in which I felt I was dying.

(S. Bellow: *Henderson the Rain King*)

[far]

And I would have been far *more cagey* about taking on US Intelligence than International. (Adam Diment: *The Dolly Dolly Spy*)

[a little]

When I asked Mehmed Haider to be a little *more friendly* to Nacharyan he drew his brows together; . . .

(Kurban Said: *Ali and Nino*)

[much]

I am trying to say something much *more clever*.

(E.M. Forster: *Howards End*)

[no]

“You’re no *more black* than I am, precious, “Elijah’s voice came nearer and nearer. . . .

(James Purdy: *I am Elijah Thrush*)

[the]

The *more rich* the cemetery promised to be, the more necessary was it to leave it alone until external evidence had given us a more or less definite chronology.

(Seton Lloyd: *Foundations in the Dust*) [Ichikawa]

A Grammar of Contemporary English には次の例がある。

The *more old* he is, the more wise he becomes.

[—times]

The girl is a virgin. She is fifty million times *more pure* than you or I.

(S. Bellow: *Henderson the Rain King*)

(D) 叙述用法でかつ *than* clause が後にくる。

The children caught the fever and were *more noisy* than usual.

(J. Steinbeck: *The Grapes of Wrath*)

He was empty, face to face with a sense of dread *more intense* than anything he had ever felt before.

(Richard Wright: *The Outsider*)

He had eaten just enough to catch it mildly so the next day when they hauled him up he could pretend his cramps were *more severe* than they were actually, . . .

(David Morrell: *First Blood*)

A Grammar of Contemporary English には、叙述用法で *than* clause が

後にくるとき、迂言形式になりやすいとして次の例を挙げている。

John is *more mad* than Bob is.

It would be difficult to find a man *more brave* than he is.

He is *more wealthy* than I thought.

以上の要因は手持ちの文例が50例以上あるものを4つの項目に分けたものである。それぞれの形容詞の95%以上が CLASS II に分類されるものである。CLASS II の形容詞の比較級に、これら屈折形式化制限要因は、相対的に強く働くと思われる。

文例は、小説の場合、ほとんどすべてが1930年以降のものであり、新聞、雑誌、百科事典の場合、すべて最近20年間のものである。

例文中のイタリック体は筆者によるものである。

参考文献

- Curme, G.O., *Syntax*. Tokyo (Maruzen), 1974.
 Fries, C.C., *American English Grammar*. New York (Appleton Century Crofts), 1940.
 Jespersen, O., *The Philosophy of Grammar*. London (Allen & Unwin), 1924.
 —. *Essentials of English Grammar*. London (Allen & Unwin), 1924.
 Leech, G.N., *Semantics*. Middlesex, England (Penguin Books), 1974.
 中島文雄『文法の原理』(研究社), 1949.
 大沼雅彦『性質状態の言い方, 比較表現』英語の語法(研究社), 1968.
 小川佐太郎『形容詞』英文法シリーズ(研究社), 1954.
 Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik, *A Grammar of Contemporary English*. London (Longman), 1972.
 Strang, Barbara, *Modern English Structure*. Newcastle (Edward Arnold), 1974.
 安井稔, 秋山裕, 中村捷『形容詞』現代の英文法(研究社), 1976.
 Zandvoort, R.W., *A Handbook of English Grammar*. Tokyo (Maruzen), 1972.